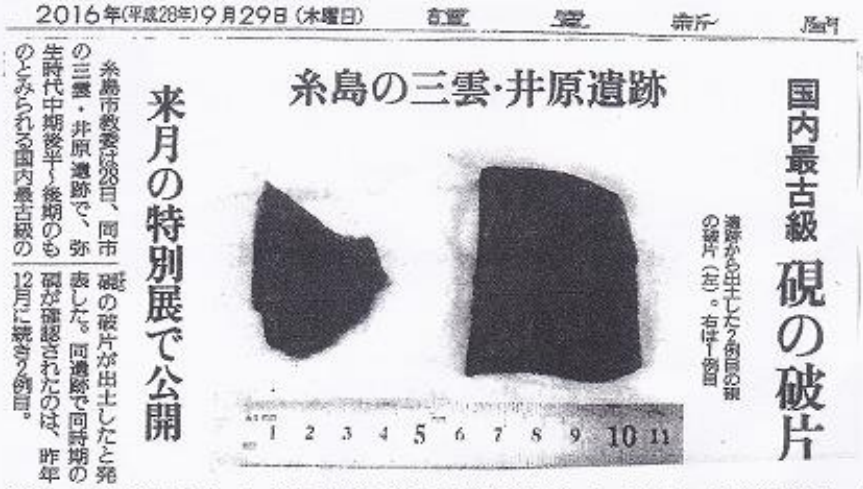
古代史の会・大分　　唐津・糸島研修旅行報告（２）

１．糸島市立 伊都国歴史博物館　　平成 29 年 4 月 11 日　茶谷勇司

当館は 1987(昭和 62)年に開館した、「伊都歴史資料館」を前身とし、その後、国宝や重要文化財を展示できる施設として、2004(平成 16)年１０月、「伊都国歴史博物館」として再出発。2010(平成 22)年１月、前原市・二丈町・志摩町の一市二町が合併、新しく糸島市が誕生したことに伴い、当館も「糸島市立伊都国歴史博物館」と改称し、収蔵資料も大幅に増加した。同年６月、文化庁から「重要文化財公開承認施設」に認定され、より充実した特別展や企画展の開催が可能となった。

伊都国の時代を中心としながら、旧石器時代から近世・近代までの糸島地域の歴史を通史的に展示し、東アジアや日本の歴史の中で糸島地域が果たしてきた役割を語っている。
建物は旧館と新館からなり、新館４階の「展望スペース」からは周囲の山々と糸島平野を見渡すことができる。新館３階に上るエスカレータは狭く薄暗く作られており、
「現代と伊都国をつなぐタイムトンネル」となっている。
３階の常設展示室には国宝指定の平原遺跡出土の銅鏡、勾玉、などの出土品や遺跡の発掘時の復元模型が展示されている。平原遺跡出土の直径 46.5ｃｍ、重さ８kgの大型内行花文鏡(ないこうかもんきょう)は日本一大きな銅鏡である。

2016 年 12 月 28 日、同市の三雲・井原遺跡で発見された「国内最古級の硯の破片」が特別展示されていた。同遺跡は、中国の史書「魏志倭人伝」が記す、伊都国の王都とされ、硯は中国の出先機関・楽浪郡から渡来した人々が文字を書くために使用したとみられる。


2016年(平成28年)9月29日(木曜日)

国内最古級 硯の破片

糸島の三雲・井原遺跡

遺跡から出土した2例目の硯の破片（左）。右は1例目

来月の特別展で公開

糸島市教委は28日、同市の三雲・井原遺跡で、弥生時代中期後半～後期のものとみられる国内最古級の硯の破片が出土したと発表した。同遺跡で同時期の硯が確認されたのは、昨年12月に続き2例目。

なお本館の初代館長として、平原遺跡発掘の功績を称えて、原田大六氏を予定したものの、開館準備中に逝去され、このために同氏の業績を称える目的のもとに銅像が制作されて、館敷地内に建てられている。

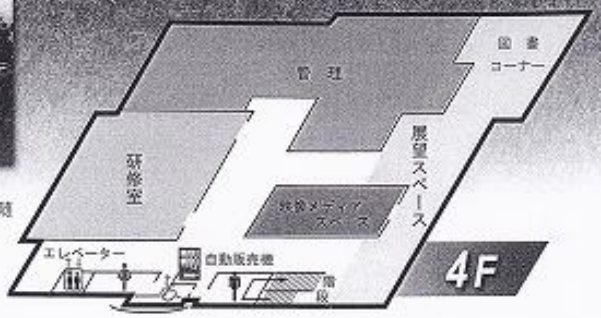
一主な引用文献『糸島市立伊都国歴史博物館、常設展示図録』同館編 平成 23 年 3 月刊

展望スペース

最上階は四面ガラス張りで、周囲 360°を見渡すことができます。ここから伊都国の四季の移り変わりを体感できます。

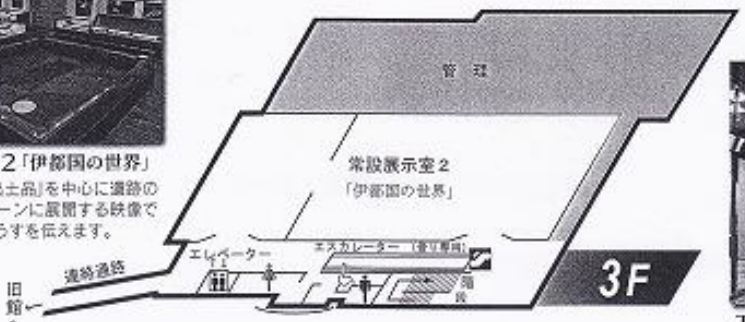
研修室

文化財講座や講演会などを随時開催しています。



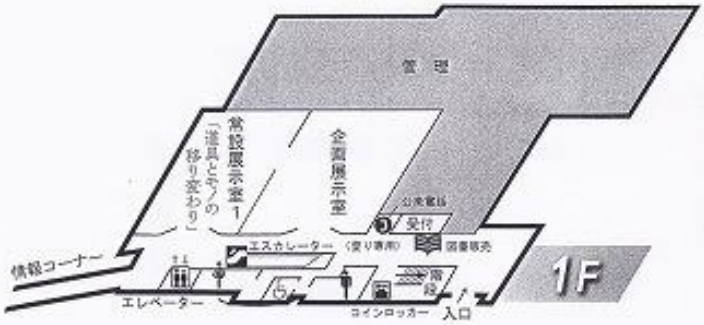
常設展示室2「伊都国の世界」

国宝「平原王墓出土品」を中心に遺跡の模型、大スクリーンに展開する映像で伊都国繁栄のようすを伝えます。



エントランス

朝鮮半島と日本をつなぐ国際交流都市伊都国の地理的環境を示す壁面があります。



常設展示室1「道具とモノの移り変わり」

道具とモノの変化によって旧石器時代から現代までのくらしの移り変わりを振り返ります。伊都国探訪の基礎を学びます。

旧館常設展示室1

明治・大正・昭和時代の糸島のくらしをレストアされた家屋を使ってやさしくやさしく紹介しています。

旧館常設展示室2

古墳時代から近世・中世・現代までの糸島をテーマ別に紹介しています。糸島の歴史と文化に関する資料も展示しています。

国宝 平原王墓出土銅鏡一覧

●赤色している鏡
同じ色の鏡は
原型が同じ兄弟鏡

●方格規矩四神鏡
<6号鏡>
約18.5cm「尚方作竟…」銘

●方格規矩四神鏡
<7号鏡>
約16.1cm「尚方作竟…」銘

●方格規矩四神鏡
<8号鏡>
約16.1cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
<9号鏡>
約16.1cm「尚方作竟…」銘

超大型　内行花文鏡
<13号鏡>
約46.5cm

超大型　内行花文鏡
<14号鏡>
約46.5cm

●大型　内行花文鏡
<15号鏡>
約27.1cm「大富子孫」銘

方格規矩四神鏡
<21号鏡>
約20.5cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
<22号鏡>
約18.7cm「尚方作竟…」銘

●方格規矩四神鏡
<23号鏡>
約19.1cm「尚方作竟…」銘

方格規矩四神鏡
<24号鏡>
約18.8cm「尚方作竟…」銘

●方格規矩四神鏡
<25号鏡>
約18.8cm「尚方作竟…」銘

●方格規矩四神鏡
<31号鏡>
約18.6cm「陶氏作竟…」銘

●方格規矩四神鏡
<32号鏡>
約18.8cm「陶氏作竟…」銘

●方格規矩四神鏡
<33号鏡>
約18.8cm「陶氏作竟…」銘

●方格規矩四神鏡
<34号鏡>
約16.6cm「陶氏作竟…」銘

方格規矩四神鏡
<35号鏡>
約16.6cm「陶氏作竟…」銘

平原王墓から出土した銅鏡四〇枚すべてをほぼ同じ縮尺で並べてみた。膨大な数と国内最大を誇る内行花文鏡の大きさに迫力を覚える。ただこの鏡、一つ一つをみていくといくつかの特徴がある。

まず、鏡の種類が少ないこと。大きく分けると三種類だけである。方格規矩四神鏡三二枚、内行花文鏡七枚、四鈕鏡一枚で、大部分は方格規矩鏡が占める。

二つ目は、同じ原型から造られた兄弟鏡が多いこと。超大型内行花文鏡五枚一組を先頭に方格規矩鏡では六組、あわせて七組の兄弟鏡がある。

さらに鏡背に薄い緑などの色を着けた鏡の存在。半数近くにみられる。この着色は鋳造後、意図的につけられたことはわかっているが、絵具のような顔料を塗ったものではなく、手法については謎となっている。割られるなどの埋葬手法だけでなく、それぞれの鏡についての謎も今後解いていく必要がある。

●方格規矩四神鏡
<1号鏡>
約23.3cm「尚方佳異…」銘

方格規矩四神鏡
<2号鏡>
約21.0cm「尚方作異…」銘

●方格規矩四神鏡
<3号鏡>
約21.0cm「尚方作異…」銘

●方格規矩四神鏡
<4号鏡>
約20.9cm「尚方作異…」銘

●方格規矩四神鏡
<5号鏡>
約18.4cm「尚方作異…」銘

超大型　内行花文鏡
<10号鏡>
約46.5cm

超大型　内行花文鏡
<11号鏡>
約46.5cm

超大型　内行花文鏡
<12号鏡>
約46.5cm

内行花文鏡
<16号鏡>
約18.8cm「□□子孫」銘

四鈴鏡
<17号鏡>
約16.5cm

方格規矩四神鏡
<18号鏡>
約16.1cm「尚方作異…」銘

●方格規矩四神鏡
<19号鏡>
約15.9cm「尚方佳異…」銘

方格規矩四神鏡
<20号鏡>
約18.5cm「尚方作異…」銘

方格規矩四神鏡
<26号鏡>
約18.3cm「尚方作異…」銘

●方格規矩四神鏡
<27号鏡>
約15.8cm「尚方佳異…」銘

方格規矩四神鏡
<28号鏡>
約18.2cm「尚方作異…」銘

方格規矩四神鏡
<29号鏡>
約16.5cm「尚方佳異…」銘

方格規矩四神鏡
<30号鏡>
約18.9cm「尚方佳異…」銘

●方格規矩四神鏡
<36号鏡>
約16.2cm「陶氏作異…」銘

●方格規矩四神鏡
<37号鏡>
約16.4cm「陶氏作異…」銘

方格規矩四神鏡
<38号鏡>
約18.8cm「陶氏作異…」銘

●方格規矩四神鏡
<39号鏡>
約18.6cm「陶氏作異…」銘

方格規矩四神鏡
<40号鏡>
約11.7cm

2．原田 大六　　昭和を駆けた在野の考古学者　伊都国にロマンを求めた男

1917(大正 6)年1月1日、福岡県糸島郡前原町(現糸島市)で建築塗料材料商店主の父、原田猪之助、母ユクの長男として生まれ、大正6年の生まれから「大六」と命名。

1926(大正15年)　父とともに加布里(かふり)の釜塚古墳を訪れる。深い感動を覚える。

1929(昭和4)年　旧制糸島中学校(現福岡県立糸島高校)に入学

在学中、東洋史の授業を担当する安河内隆教諭の薫陶を受け、考古学に傾倒した。

安河内とともに糸島各地を歩いて遺物の採集にふけった。校長から「郷土室」をあてがわれ、採集した土器・石器の整理を進め、現在の糸島高校博物館の基礎とした。考古学に傾倒したために成績は本人いわく「超低空飛行」で中学卒業と同時に上京、津上製作所に就職、計測器の研磨工に就いたが召集され、中国大陸各地を転戦。武昌で終戦を迎えて1946年復員。故郷に戻り中学校の代用教員になるも、大陸で憲兵だった経歴が仇となり、公職追放で失職した。

その後、突如として「おれは古学をやる」と親族に宣言。土地・家・金・学歴・資料・書物・妻・職を持たない**八無斎**を名乗った

1947(昭和22)年　中山平次郎博士＊を訪ねて師事。考古学の本格研究に取り組む。

板の間で正座したまま、1日6時間以上のマンツーマンの講義が9年近く続き、以後、糸島地方を中心に多くの遺跡の調査に関わった。

＊中山平次郎博士　1871(明治4)年6月(京都市)～1956(昭和31)年4月逝去1（福岡市）

明治後期から昭和にかけての、病理学者(九州大教授)、考古学者、考古学分野で貢献。

「主な業績」~元寇防塁の命名、弥生時代の提唱など。

1949年、三雲石ヶ崎遺跡の発見と発掘調査。1952年、志登支石墓群の発見など。

1954年より、沖ノ島祭祀遺跡調査　　1956年より　平原遺跡調査

1956年3月、小学校教員の原田イトノと結婚。生活が安定、考古学研究に専念できた。

1978年 第37回『西日本文化賞』受賞"永年にわたる考古学の研究、発掘と啓発の功績"

1985(昭和60)年逝去　享年68歳

国宝出土遺跡の調査

原田は、後に国宝に指定された二つの著名な古代遺跡（沖ノ島祭祀遺跡と平原遺跡）の発掘調査に深く関わり、調査成果の整理・報告書の作成に尽力した。

① 沖ノ島祭祀遺跡

沖ノ島は周囲4km、九州本島から直線にして57km,玄界灘の洋上にぽつりと浮か孤島で、宗像三女神のひとり田心姫神(たごりひめのかみ)を祀る沖津宮があることで知られる。神の宿る島として篤い信仰の対象となり、現在でも厳しい禁忌規制の下、「不言様(おいわずさま)と呼ばれ、護り継がれている。

1954年、出光佐三氏が発起した宗像神社復興期成会による神社史編集事業の一環として、沖ノ島の考古学的調査が実施されることになり、この年から3次にわたる調査を実施。

この調査により、沖ノ島で行われた祭祀が4世紀～10世紀まで長期におよんだこと、大和政権が深く関わった国家的な祭祀が行われていたことも判明した。
発見された奉献品は総数12万点に及び、その豪華さから「海の正倉院」とも呼ばれ,多くが国宝、重要文化財として宗像大社神宝館で保管されている

原田は計6回行われた現地調査のうち、第1回を除く、5回の調査に参加している。
現地での調査が終ると、遺物の整理作業は宗像大社で行われ、原田は整理作業をこなし、測図や出土品の整理、実測、製図はおもに原田が担当した。報告書作成にも中心的に取り組み、『沖ノ島』の報告書の本文約270頁のうち、全体の7割近くの執筆を担当した。

② 平原遺跡

1965年1月、糸島市有田字平原で、土地所有者の井手勇祐氏一家が、耕運機で蜜柑の苗木の植樹溝を掘削中、突然、真っ赤に水銀朱で染まった土とともに多量の銅鏡片や鉄刀、ガラス玉などが出土し、一同を驚かせた。これが平原遺跡の発見の発端となった。
調査は、翌2～5月にかけて原田を調査主任として進められた。作業には地元中高生らも応援に駆け付けたという。

原田は平原遺跡をあえて「弥生古墳」と名付けた。主体部に割竹形木棺を採用し、「墳墓の形態からして古墳時代のものでなく、それ以前の構造を呈していること、出土した船載鏡35面全てが漢中期から後漢の前半を下らないものばかりであるという事実によっている。」ことから、古墳時代の首長墓の条件を既に備えた弥生墳墓という意味であった。

その後の発掘調査で新たに出土した墳墓や土器などによって1号墓の年代が、弥生時代終末に収まることが明らかになり、原田の見解が、大筋で正しかったことが示された。

発掘調査中の中山平次郎博士と原田

ケンカ大六～その強烈な個性と攻撃的な論調から**ケンカ大六**の異名を持っていた。
特にアカデミズムに対する批判精神は凄まじく、著書では各地の大学教授を名指しで批判することをためらわず、著書『万葉革命』の序文では『真理を愛する若い全国の学生諸君に訴える。骸骨がネクタイを締め、背広を着て教壇に立ち、骸骨万葉学の講義を行い、学生諸君を骸骨化しょうとしている。』と述べている。

一主な引用文献　『昭和を駆けた 原田大六』伊都国歴史博物館　平成22年10月刊

原田大六著書および関係書籍一覧

原田大六の執筆活動は、中国からの復員後間もない昭和二二（一九四七）年に開始される。『日本国家の起原』の第一稿を皮切りに、昭和二九（一九五四）年には初の刊行図書となる『日本古墳文化―奴国王の環境』を出版、昭和六〇（一九八五）年に亡くなるまでの三八年間、考古学の調査・研究と並行して続けられた。最盛期は、一九七〇年代～一九八〇年代前半の時期で、ほぼ毎年のペースで出版がなされており、そのスピードに驚嘆を覚える。原田大六の著書の特徴は舌鋒の鋭さにあり、年を経るに連れて研ぎ澄まされ、「けんか大六」が紙面を舞台に大暴れ。このスタイルが人気を呼び、ベストセラーを生み出した。亡くなって没後およそ四半世紀経つ今日においても熱烈なファンが日本全国に分布する。

邪馬台国論争
（三一書房　1969年）

古家争明、議乱を極める「邪馬台国論争」に原田大六が鋭く切り込む。ベストセラーとなった。

実在した神話
-発掘された「平原弥生古墳」-
（学生社　1966年）

原田大六の代表著書。伊都国をフィールドとして活躍した氏の少年時代から平原遺跡発見時までの自伝と、平原の被葬者像と謎に迫る書。

磐井の叛乱
-抹殺された英雄-
（河出書房新社　1963年）

ベストセラーとなった書籍。磐井の叛乱の実情を古人・古墳と銘鉄古墳の証、神ノ島を媒介として解き明かす。

日本古墳文化
-奴国王の環境-
（東京大学出版会　1954年）

記念すべき原田大六の初出版書籍。朝日新聞紙上に連載した「天皇の故郷」を改稿したもの。

万葉集点睛　二（下）
（丸ノ内出版　1975年）

万葉集点睛　一（上）
（丸ノ内出版　1975年）

万葉集の謎について明解を試みた書。著者曰く「本書は、国文学者と自認される、万葉集の研究に身を捧げているすべての人に捧げた公開質問状である」

万葉集発掘
-考古学による万葉解読-
（朝日新聞社　1973年）

万葉集の謎、枕詞を深く掘り下げ、万葉時代の思想・宗教・風俗などに新しい光を当てた画人未踏の研究。

新稿　磐井の叛乱
（三一書房　1973年）

10年前に絶版となった著書を700余頁にわたって修訂し、新稿として刊行。

日本国家の起原（上）
（三一書房　1975年）

敗戦後間もない1950年に執筆し、25年後にやっと日の目を見た著書。中山平次郎博士の教えを受け継ぎ、発展させた原田学説の基礎となる大著。

日本古墳文化
-奴国王の環境-
（三一書房　1975年）

絶版となった初出版書籍の復刊版。

邪馬台国論争（下）
（三一書房　1975年）

邪馬台国論争（上）
（三一書房　1975年）

ベストセラー「邪馬台国論争」の新書版。

原田大六論
-原田先生後援会編-
（中央公論事業出版　1976年）

新聞等のマスコミに取り上げられた原田大六の記事を集成。昭和24年～51年までを掲載。時代の雰囲気原田大六の姿を知ることができる。

※ハードカバー表紙に文字が無いため、原を掲載。

日本国家の起原（下）
（三一書房　1975年）

銅鐸への挑戦1-大陽か台風か
(六興出版　1980年)

日本神話に真実を見出し、考古学と結びつけ、独自な原田学の第一人者。

雷雲の神話
(三一書房　1978年)

記紀神話の中に史実を見出し、日本古代史の謎を解き明かす。

卑弥呼の鏡
(六興出版　1979年)

日本一の大陵を発掘した原田大六が、人と鏡の関係について観念論的に解説する古代鏡入門の書。

卑弥呼の鏡
(六興出版　1978年)

卑弥呼の墓
(六興出版　1976年)

那珂台地の所在地とともに話となっている「卑弥呼の墓」。本書では、全国に散らばる卑弥呼の墓の比定地について真贋を原田大六が確定する。

阿弥陀仏銘碑の謎-浄土門と宗像大宮司家
(六興出版　1984年)

宗像大社に伝わる「阿弥陀仏銘碑」の謎に迫る書。

銅鐸への挑戦5-倭国の大乱
(六興出版　1980年)

銅鐸への挑戦4-捨てられた銅鐸
(六興出版　1980年)

銅鐸への挑戦3-祈り高き銅鐸
(六興出版　1980年)

銅鐸への挑戦2-飛鳥の巫女王
(六興出版　1980年)

平原弥生古墳
-大日孁貴の墓-
(平原弥生古墳調査報告書編集委員会編　葦書房　1993年)

平原遺跡の発掘調査報告書。平原発見から28年を経て刊行された本書はすべての考古学者が待ち望んだ報告書であった。大鏡をはじめとする出土品は巨大な図版で紹介しており、迫力満点で詳細な観察も可能。国内を代表する遺跡の調査報告書の一つといえる。

天皇の故郷-国宝記念「平原弥生古墳」出土品一括
(原史新報社　2007年)

原田大六が85歳の時に系譜新聞紙上に連載した「天皇の故郷」を55年ぶりに復刻。原田大六の興味となる書。

実在した神話-発掘された「平原弥生古墳」
<新装改訂新装版>(学生社　1995年)

ベストセラーを博した著者の新装版。原田大六の熱い思いの詰まった本書は根強い人気を誇る。

悲劇の金印
(学生社　1992年)

原田大六渾身の書。金印「漢委奴国王」の謎を解く

孤高の天才　原田大六
-その学問と波乱の生涯-
(原田大六記念館　歴史新報社　2010年)

原田大六の生涯における様々な出来事をエピソードを交えて掲載。

心の墓標-師弟通信集
(原田大六記念館編　歴史新報社　2009年)

強い師弟関係で結ばれた中山平次郎博士と原田大六の通信を収録。原田大六が中山平次郎博士の思い出を綴った感動のエピソードも掲載。

万葉革命
-よみがえる万葉人の魂のおびえ-
(原田大六記念館編　歴史新報社　2008年)

万葉革命宣言者、原田大六による新解釈。著者曰く「『万葉集』研究を施の種にしている多いた大学教授は読むべからず。」